

宇都宮エスペール賞選考準備委員会

第1回会議録（概要）

- 1 会議名 第1回宇都宮エスペール賞選考準備委員会
- 2 議題 (1) 会議の公開・非公開について
(2) 座長の選出について
(3) 説明事項
 ア 提言書について
 イ 事業の体系について
(4) 協議事項
 ア 募集要項について
 イ 募集対象分野について
 ウ 選考について
- 3 開催日時 平成13年2月14日(水)午後1時30分～4時
- 4 開催場所 市役所14階 14A会議
- 5 出席者氏名 委員 = 上野憲示委員, 田淵進委員, 谷新委員, 鎌田邦義委員
 吉原郷之典委員, 若林治美委員
 事務局 = 高梨教育長, 高野政策担当副参事, 桜井文化課長, 刑部政策担
 当副主幹, 西田文化課課長補佐, 菊池主査, 大垣主査
- 6 公開・非公開の別 公開
- 7 傍聴者の数 1人
- 8 発言の要旨
 - (1) 会議の公開・非公開について
 - ・会議を原則として公開することについて委員全員が了承
 - (2) 座長の選出について
 - ・上野委員を座長に選出
 - (3) 説明事項
 - ア 提言書について
 - イ 事業の体系について

美術に関しては、いきなりトップレベルとはなりづらい。しかし、この制度が呼び水となる。例えば、県内にアトリエを持つ人が増えているなど効果が予想される。

音楽では年齢的に低い者を育てながら発表の場を設けることも必要。

この賞は、原石を発掘するきっかけとなればと思う。その原石が将来的に全国レベルに到達あるいは全国へチャレンジし、全国へ並ぶよう育っていく人材に対して与える賞と考える。そういう意味で原石は見つけ出せるのではないかと思う。

選んで、その人が全国レベルへ到達しない可能性もある。可能性を引き出せるような選考の方法を上手く考えていければと考えている。

(4) 協議事項

ア 募集要項について

宇都宮在住というのは、実際に住んでいるあるいは住民票があれば良いのか。

最終的には宇都宮の芸術文化の振興になること、将来的に宇都宮と太いパイプができることがポイントだと思う。

活動の拠点が宇都宮とは？

市民芸術祭と同じように、発表の場が宇都宮、宇都宮に団体の所在地がある人など広い解釈をしている。

宇都宮にゆかりのある者とは？

ゆかりのある人であれば宇都宮と深いかかわりができるだろうということ考えている。

応募資格としては、宇都宮とかかわりがあれば、市とかかわりを深くしてもらえればという、希望的ということか。

この事業は若いアーティストを育てることが中心になるが、そのアーティストが宇都宮とのかかわりを持って宇都宮で発表するなどにより、ほかの若手が育つというもう一つのねらいがある。

市民へ還元するというのであれば、受賞者にどのような環境を与え、市民とどうかかわっていけるのかを考えるべき。受賞者と市民の関わりが明確でない。具体的に、受賞者の待遇や立場、受賞者をどう育てていくのかという部分が大切。

賞の具体的な金額は？

若いアーティストにとって魅力のある額を考えている。

国籍は問わないのか。

厳密に考える必要はないと思っている。

北関東にはアジア系の作家が多い。賞金を目的に応募することが考えられる。要件の幅を持たせるかどうかは難しい問題がある。

単なる賞金目的など問題がある場合は選ばなければよいのではないか。今の時代にあって日本人に限るということも難しいと思う。

イ 募集対象分野について

ギャラリー関係とホール関係を比較する場合、大変難しい。また、ギャラリー関係内でも難しい。ギャラリー関係とホール関係に分け交互に選考するほうがまだ、比較がしやすいと考える。また、美術、音楽、その他の芸術を三年交替で実施する案を考えた。

審査も含めて考えたときに、どのような形の応募が良いのか委員の皆様にご意見をいただきたい。

美術関係と音楽関係が主になると思う。活動にお金がかかるのは美術と音楽。美術と音楽に比重が多くなるのは、仕方ない。

美術、音楽、その他の芸術を三年交替で実施する方法は良くないと思う。

伸び盛りの若手芸術家が三年待つのはつらい。選び分けができるのであれば、毎年チャンスを与えたい。

やはり美術と音楽のほうが市民の理解も得やすい。音楽と美術を1年おきに実施すれば受賞のチャンスも増えてくると思う。

流派のある芸術の分野では、受賞が災いしてしまうこともある。美術と音楽に限定してしまうと例えば、全国レベルで活躍しているパフォーマンスのアーティストなどもいるので難しい。

美術関係と音楽関係が多いことは予想される。他分野でも全国レベルで活躍をはじめているアーティストはいるが、人数は少ない。

その年に目だった活躍をしているのは、ある意味では選び時。2年に一度では時期を逸する。分野を比較するのは難しいが、毎年、全分野を対象ということであれば「選び時」の問題は解消されると思う。分野のバランスなのかタイムリーに選んでいくのか、そのあたりの選択はどこかでしていかななくてはならない。

選考委員の数などの問題もある。ギャラリー関係、ホール関係それぞれで選考委員を選んでいけばより適格な選考ができる。選考委員が他分野を選考するといった問題もある。

その他の芸術についても考慮が必要。

県の文化奨励賞は全分野を対象に選考委員も全分野から出ている。先ほどのタイムリー性がどうかクリアできればギャラリー関係とホール関係に分け1年置きに行う方法が良いと思う。

原石を見つけるということは、それほど緊急（毎年）でなくても見つかるのではないか。例えば、音楽コンクールなどでは、何年かに一回のチャンスしかないものもある。伸びる時期をタイムリーにキャッチすると更に伸びる。

確かにタイムリー性があるので複数の受賞が可能であれば良い。

全分野を対象とすると、選考時に土俵がまったく違ったところでの選考となる。その点が大きな課題。一年おきであればそれほど波をはずしたことになるのではないのでは。

ギャラリーとホールに分けるとどうしても違和感がある。各分野の比率でみると全分野を対象とすることは、平等のようで平等でない。市民が納得できるような標記の仕方ができればと思う。

逆に、美術しか対象としないほうが市民にとって違和感が大きい。

宇都宮には美術館があるのであるから、宇都宮の特徴的な芸術としての美術を対象と

することが良いのでは。

芸術全体の目標をつくるということもこの事業の大きな意味があるので全分野となった。美術と音楽を柱としても他の芸術もあるので違和感のないような方向で検討したい。応募と推薦の二通りあるが、国で実施している在外研修等は推薦なので出てくる人はある程度整理されてくる。

懇談会では応募をしやすいように公募とした。

ウ 選考について

例えば、美術と文芸を比較検討するとき、応募書類等どういうものが材料として必要なのか。また、同分野においても実際に演技等をしてもらうわけではないので、比較するための材料は何か、団体で活動する者と個展で活動する者等の比較について教えていただきたい。それが、募集時に必要な資料としてつながっていく。

このことから、この会議では、選考について先に議題とし、その後、応募書類等について議題としたい。

音楽では、実際の演奏を聴くべきだ。演奏が馴染むもの馴染まないものがあるが、書類や参考資料で全て決めてしまうのはどうか。

一つの種目だけが実際のものをみるということにはならない。

芸術の表現としてみる必要がある。

全分野から応募があったときに全分野の選考委員を選ぶのは不可能。

事前の推薦の制度やある程度最初の段階で絞り込むなどの方法が考えられる。

一次、二次といった選考の方法も考えられる。

一次選考で相当絞り込んでしまうこと。現在のレベルも重要であるが、今後数年間どうしたいかを十分聞くべきだ。面接等で十分聞けるよう配慮する必要がある。

ジャーナリストに推薦をお願いして選考委員が選考といった二段階での選考の方法もある。

二次審査に残った分野に専門の選考委員がいないこともある。その場で実際の演奏等の実技ができるかどうか。また、面接や作文においても話しや文章が苦手な人もいるので適格に捕らえられるか、ご意見をいただきたい。

資料を鵜呑みにすると間違いが起こることがある。何らかの形で一次、二次で絞り込みの審査を行うことやできるだけ時間をかけて作家の考えを聞くことも必要。

また、選考委員も県外の委員では宇都宮で活動している作家についてはほとんど知らないという前提に立つべき。作品を実際見られないので、資料だけの判断では支障がでる。面接が必要だ。

推薦などでレベルを揃えておくような前作業が必要と思う。

推薦のもらえる人は、それなりの履歴がありレベルは分かると思う。その中である程

度の人数（10人～15人程度）に絞り込み、二次審査で審査に必要なものを揃え、県外の委員に審査をお願いし、更に2・3人に絞り込む、そして最終的に面接で将来の考え方を聴くといった方法がある。

二段階の審査ということであれば、例えば、県内で芸術文化関係に携わっているマスコミの人達にお願いすることもあるかと思う。

懇談会での意見では、推薦だけにしてしまうと問題がある。応募を希望する人には全てチャンスを与えるほうが、この制度の主旨に合っているということだった。推薦も可としておかないと埋もれた人が出てこない。

公募としたのは、この賞が欲しい人、情熱のある人が応募できる道を開いておくことにある。

異分野を比較する方法はあるか。

下野新聞社でも異分野を対象に「下野県民賞」を実施しているが、異分野の比較は非常に難しい。出てきた応募資料を中央の選考委員何人かに判断してもらうしかない。

山口県展では県外の委員三人で行う。その場で声の大きい委員が推す作家が通ってしまうことがある。一回の審査ではこうしたリスクがある。事前にそのジャンルに詳しい人にある程度粒をそろえてもらうことが必要ではないか。

作品だけの選考では、専門外の分野をみるのは難しい。この事業でもその可能性があるが、具体的に何があれば判断しやすいか。

展覧会等の履歴や作品等の写真、面接等での本人の考え方が審査の際の判断資料となる。

原石を見ぬくのに実績が全くないのは無理。何らかの光るもの（実績）がないと選べないし、選らんで誰も知らない人ではどうか。全国レベルに達してなくても可能性は十分にある人、光るものが1つ2つないと選べない。

選考委員の質にもよるのではないか。こういう人たちが選んだのなら仕方ないといったように。

ある程度権威のある中央の先生をお願いして、お膳立ては地元のジャーナリストあるいは識者が行うことがベターと思う。

選考委員の謝金は県外の委員で税や交通費等込みで10万円である。選考委員については次回議論していただきたい。

10万円の謝金は審査委員のクラスでは中の上クラス。

システムとして二段階とするのか一回で行うのか。

概ね一回は書類の段階で絞る必要があると思う。

地元の委員が最低一人は入っていないと、最終段階で地元の委員に聞くことが必要となる。全員県外の委員で構成するのは良くない。

コンセール・マロニエでは地元の委員が二名入っている。この事業でも地元の委員が入ったほうが良い。

選考委員は何名を考えているのか。
五名を考えている。

その他

次回の会議は、3月9日午後1時30分から、よろしく願いしたい。
選考委員についても次回、候補者について考えを伺いたい。